



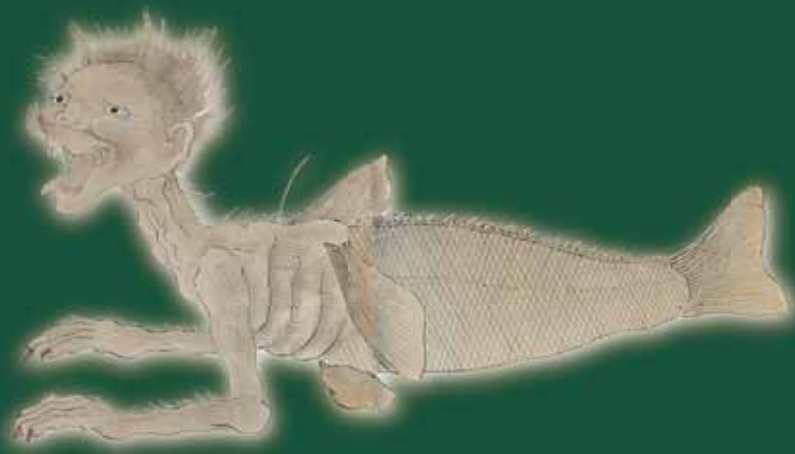
妖怪展

神・もののけ・祈り

かみ

もののけ

いのり



2009 青森県立郷土館 東奥日報社

ごあいさつ

柳田國男は『妖怪談義』（昭和31年12月）の自序の最後に、

我々の畏怖といふものゝ、最も原始的な形はどんなものだつたらうか。何が如何なる経路を通つて、複雑なる人間の誤りや戯れと、結合することになつたでせうか。幸か不幸か隣の大國から、久しきに亙つてさまざまな文化を借りて居りましたけれども、それだけではまだ日本の天狗や川童、又は幽霊などといふものゝ本質を、解説することは出来ぬやうに思ひます。

（『定本 柳田國男集 第4巻』昭和48年6月第9刷 筑摩書房）

と述べております。このことは、まさに妖怪または化け物と呼ばれるものを解明する上で、重要な観点ともいえるのではないのでしょうか。

今回の特別展では、代表的な妖怪を絵画史料などで紹介するほか、超自然現象、怪異、恐怖、不安、零落した神など妖怪が生まれた背景や、異形の神々、幽霊なども紹介し、人々が抱く妖怪に対するイメージや畏怖の念、そして柳田が述べている我国の妖怪の本質の一端をご理解いただく一助となれば幸いです。

最後になりますが、貴重な資料を出陳いただきました国立歴史民俗博物館及び東北大学附属図書館を始めとした所有者の皆様、並びにご協力いただきました関係各位に対し、心から謝意を表します。

平成21年8月

青森県立郷土館

館長 外 崎 純 一

目 次

はじめに	1
目次・凡例	2
序論—妖怪とは何か	小山隆秀 3
第一章 さまざまな妖怪	7
第二章 妖怪が生まれた背景	29
第一節 さまざまな神仏	31
第二節 自然の怪異	40
第三節 生と死の世界	44
第三章 異界を探る	51
特論—異界探求と津軽の国学	本田 伸 56
コラム 「お化けを守る会」	59
弘前藩領における怪異発生年表	62
展示資料一覧	68
謝辞・協力先一覧	70

凡 例

- 本書は、平成21年8月28日～10月12日まで開催した特別展「妖怪展—神・もののけ・祈り—」の図録である。
- 図版番号は必ずしも陳列順と一致しない。また、会期中に展示替えを行うため、本図録に掲載されている資料が陳列されていない場合がある。
- 図版撮影は当館が行った。提供を受けた写真については図版注に記した。
- 本特別展の企画は、当館学芸員小山隆秀が行った。
- 本書の執筆は、小山隆秀が担当し、特論については当館学芸員本田伸が執筆した。編集及びレイアウトは当館学芸員太田原慶子が行った。

(表 紙) 上：岩木山のある沢で目撃されたという不思議な生物
「異物図会」(弘前市立弘前図書館蔵より)
下：人魚の図「同上」(同館蔵より)
(裏表紙) 関野準一郎「百鬼夜行」『幽霊の書』(改訂版・当館蔵)より

序論 — 「妖怪」とは何か —

小 山 隆 秀

近年、全国的に静かな妖怪ブームが続いているといわれます。岩井宏實は、かつて妖怪が流行した平安時代、室町末期、文化文政期は、それぞれ、末法思想、応仁の乱による政治的空白期間、流行神や流行仏がブームになった時代であり、社会不安の増長した時代であったと指摘しています。

しかし「妖怪」とは、いったいどんな存在なのでしょう。辞書で「妖怪」を調べてみると、

- 1 「妖怪」①人の知恵では理解できない不思議な現象や、ばけもの。変化。ようけ。妖鬼。②あやしい感じのすること。わざわざを招きそうな不吉なさま。③わざわざと危険。（『日本国語大辞典』小学館）
- 2 「妖怪」ばけもの。もののけ。妖魅。妖精。妖鬼。妖恠。妖霊。妖魔。（『諸橋大漢和』大修館書店）と記されています。

「妖怪」は1世紀初めの中国の「漢書」で「怪奇で異常な現象」の語義で使用されており、日本では「続日本紀」宝亀8年（777）2月条「大祓。宮中にしきりに妖怪あるためなり」が初出だとされ、やはり「異常な現象」や怪異の意味で使われています。東アジア怪異学会の研究によれば、古代から中世の日本では、怪異が発生すれば、王権がその意味を判定し、管理するものでしたが、室町時代にはその行為が様々な階層へも広がりました。やがてそれは、近世の都市住民による妖怪ブームの背景となりましたが、近代には否定されるべき存在となっていきました。

妖怪研究の先学者達を紹介しましょう。近代以降、最も早く「妖怪」を研究したのは、明治期の哲学者井上圓了です。井上は、妖怪を「不思議」という広い定義でとらえ、それは「虚怪」と「実怪」に大別できるとしました。さらに「虚怪」は、人間が引き起こした「偽怪」と、間違いや恐怖などの心理的

な原因による「誤怪」に分けられ、「実怪」には、自然現象から生まれる「仮怪」、そして現在の科学では解明できない「真怪」に分類できるとしています。「真怪」こそ、本来理解できない、本当の妖怪であるといい、妖怪の研究が科学の発達につながると考えていました。

井上の妖怪研究が、近代以降に主眼をおいたのに対して、それ以前の、近世の随筆や説話集などの古典から題材を選んで妖怪を分析したのが、大正・昭和期の風俗史学者江馬務でした。彼は、妖怪が実在するかどうかの論よりは、我々の祖先たちが、これをいかに見て、いかなる態度をとってきたのか、いろいろな資料から研究すべきだという姿勢をとります。そして、人、動物、植物、器物、自然物などに化けるものを「変化」とし、これ以外の存在に変わったものを「妖怪」としました。他にも、化け方には、現世的、輪廻的、精神的、実体的の4種類があると説いています。

そして、妖怪が日本人の畏怖心や恐怖の感情に根ざしたものだとし、「妖怪の多くが、信仰が失われ、零落した神々のすがたである」という仮説を打ち出したのが、日本民俗学の祖柳田國男でした。それによれば、ひたすら神を信じ、出現を恐れる第1番目の段階から、人間が神に半信半疑を抱く第2番目の段階になり、ついには、全く神を信ぜずに、その正体を暴こうとする第3番目の段階がきて、その結果、醜い姿をした妖怪像を生み出していくと考えました。また柳田は、出現場所、時刻、被害者によって妖怪と幽霊を区別し、さらに妖怪やそれに伴う怪異現象を、山の怪、道の怪、木の怪、水の怪、海の怪、雪の怪、家の怪、火の怪、音の怪、動物の怪に分類しています。柳田にとってこれらの妖怪研究は、日本の伝統的な信仰や、古い神々の姿を復元するためのものでした。

柳田の妖怪論は、その後の民俗学者にも引き継がれ、池

田彌三郎も、日本の様々な「ゆうれい」には二種類あり、特定の場所で不特定多数へ向けて出現する「ゆうれい」を「妖怪」としました。そして場所は関係なく、特定の「人」を目指して出現する「ゆうれい」を「幽霊」とし、幽霊は歌舞伎や芝居の影響で形成されていったと説きます。

今野圓輔も、日本民俗学は、絵画や文芸作品なかの創作世界の妖怪ではなく、常民の生活経験、民間伝承のなかの妖怪から、日本人の民間信仰や神霊に対する強烈な畏怖を研究するものだと言っています。

井之口章次は、身の回りの生活環境を背景として、未知のものや現象への恐怖感や不安感から妖怪が生まれる、と言いました。柳田の説を認めながらも、妖怪やお化けのすべてが、古い神々の零落した姿ではないと説きました。なぜなら、すべての妖怪やお化けがすべて、神よりも新しい時代に生まれたとはいえないからだと言います。そして妖怪の地方色を明らかにし、元となった信仰を明らかにすることから、日本における祖霊信仰や御霊信仰ごりょうの影響の強さを説きました。

民俗学の藤沢衛彦は「妖怪」とは、その時代の哲学や心理では超自然的なものであり、その時代の科学知識では原因がはっきりしないものであると言っています。

宮田登は、「妖怪」の語は比較的新しい言葉だといい、古代には妖怪という言葉はなくて「物の怪(もののけ)」といい、正体不明で、不思議な感情あるいは不安な感情をいだかせるもので、恐怖心を起こさせて、そこに人間の知恵や理解を超えた、超自然的な働きというものを認めていたと説きます。そして超自然的存在、霊的存在には神と妖怪の2つがあるが、それは、人間が祀るか祀らないかで、互いに変化し、行き来するものであると言います。そして幽霊は個人的な恐怖であり、これが共同感覚の恐怖へと移行す

ると「妖怪」となるとして、「幽霊」と「妖怪」には連続性があると言います。

近世文学の諏訪春雄も、妖怪も幽霊も「広い意味でのカミ(精霊)」であり、正当に祀られていないカミだが、妖怪は人間以外のカタチをとる、幽霊は人間のカタチをとる。また妖怪は異界の存在、幽霊は他界の存在であるとしています。

柳田の「神が零落した」説に異論を唱えたのが小松和彦です。神とは、人々に祀られる超自然的存在であり、妖怪とは人々の祀られていない超自然存在であるといい「妖怪は神が零落したものである」という柳田の説を批判し、『古事記』『日本書紀』『風土記』などの古典によれば、天地の最初から、人間を守護してくれる神と、悪をもたらす魔(妖怪)が並存していた様子があると説きます。原因がかわらない事象があると、超自然的存在としての妖怪が想定されたと指摘します。そして近世に「化け物」と呼ばれていた存在が、明治期になって「妖怪」という学術用語で取り上げるようになったと言います。そして「妖怪とは何か」厳密な定義をすることはまことに難しいとし、妖怪研究のために、さまざまな分野の研究者が参集した、国際日本文化研究センターの共同研究名でも「妖怪」という言葉の使用を避けています。

小松によれば「妖怪」とは、一言でいえば異常な現象もしくは事物、存在である。または「怪異」として理解しておくのが無難だと指摘し、「あやしい」「不思議」と思わせるものはすべて「妖怪」というラベルを貼ってかまわないとします。小松は妖怪の研究は、民俗学、国文学、美術史といった個別分野の研究に留まるべきものではなく、横断的な総合学として構築されるべき学問であると説きます。

香川雅信は、妖怪は未知のもの、不可解なものに対する恐れを種として、民俗社会の共同幻想のなかで胚胎したも

ので、人間がコントロールできない自然の荒ぶる力が具現化したものだと言います。しかし自然環境と離れ、貨幣の論理が力を持ち、合理的かつ現実的思考が広まっていた近世の江戸などの都市住民にとっての妖怪は、不可解な現象を説明するための姿無き存在ではなく、図像化し、見て楽しむ娯楽の対象となり「野暮と化物は箱根の先」「ないものは金と化物」という風潮が生まれていたといえます。

これらの様々な議論から「妖怪」の語義は、時代とともに変化しており、普遍的定義は現状ではないというのが、小説家で妖怪研究家でもある京極夏彦です。京極によれば、「妖怪」の語義は、近世から近現代にかけて、怪しいものや現象を指す意味から、化け物、近代社会が否定しようとした前近代の様々な事象、柳田の「零落した神々」…など、学問と民間の両方を行き来しつつ、醸成されたとします。そして、昭和40年代の水木しげるに代表される妖怪マンガブームのなかで、民俗学が調査収集した、姿が無く、言い伝えのなかの「妖怪」たちに形を与えるとともに、江戸時代の絵師鳥山石燕作の「化け物」たちに物語性を与えたいと、両者を融合させて、現代の一般的な妖怪像「通俗的妖怪」（前近代的存在であり、民俗学と関わり、通俗的であり、近世の「化物」の属性を受け継いでいる）が完成されたと分析しています。

そのことは実際に水木本人が、京極との対談のなかで、無形の妖怪を図像化する際には「ほんの僅か、感じて、無心に机に向かっていて、するすると形になるんです。」「さっと描くと、そのまま形になります。考える必要はない。」「塗壁（ぬりかべ）」や「一反木綿（いったんもめん）」や「砂かけ婆」が次々と生まれてくる。」と述べていることからわかります（京極夏彦『対談集 妖怪談義』）。その画像が、現代人の一般的な妖怪像に大きな影響を与えており「妖

怪」といえば「水木しげるのマンガ」を想起する人は少なくないでしょう。京極は妖怪の学術研究が、これらの現在も大衆のなかで変化しつつある「通俗的妖怪」像にも注目することの重要性を指摘しています。

このように、近世の博物的思考の普及や、近代にかけての様々な文芸作品の流行、昭和40年代の妖怪マンガブームなどの影響を受け、ほとんどの化け物や妖怪達が、現実味を失ったキャラクターへと変容してしまったかに思われますが、地方にはまだ、それらへ取り込まれていない怪異や妖怪達が伝承されています。

例えば、一昨年の岩木山麓での民俗調査で高齢の女性に、妖怪や化け物にまつわる話を尋ねたときのことです。「弘前市郊外の某山中に山菜取りに行くときに、山の神へ挨拶をしないで野宿していると、夜中にスッペオドゴ（男）が出てきて、スッペ打ち（指ではじくこと）をされてしまう」という、実体験談をお聞きすることができました。

このスッペ男の正体は全く不明です。どうやら姿がなく、気配と感触のみの存在であって、自然の神々に対する人間の非礼を叱責する役割を持っている面は、古いタイプの妖怪像を彷彿とさせます。そのような妖怪や怪異が、21世紀の現代もなお、現実感をもって身近な生活のなかで伝承されていることを示唆する、貴重な事例だといえるでしょう。

以上、多くの先学たちに導かれながら、当展示では「妖怪」を「人々の信仰を失った古い神々や、人知を越えた超自然的な現象やものに対する、人々のさまざまな不安や恐怖から生み出されてきた存在である」と考えました。

そして近世以降、都市住民によって定型化され、描かれてきた有名な化け物や妖怪だけではなく、それらを生み出す背景、源流となったであろう、ふるさとの先人達の様々な畏怖や恐怖についても、地域から照射して再考します。

（おやま・たかひで 青森県立郷土館学芸主査）

第一章 さまざまな妖怪

妖怪とは、どのような存在なのでしょう。

国語辞典や漢和辞典で「妖怪」という言葉を引けば、

- 1.「妖怪」①人の知恵では理解できない不思議な現象やばけもの。変化、ようけ②あやしい感じのすること。わざわざを招きそうな不吉なさま。③わざわざと危険。(『日本国語大辞典』小学館)
 - 2.「妖怪」ばけもの。もののけ。妖魅。妖精。妖鬼。(『諸橋大漢和』大修館書店)
- と記しています。

ただ、かつて「妖怪」という言葉は、一般的なものではなく、古代や中世には、姿なき「物の怪(もののけ)」とも呼ばれ、近世には「化け物」「天怪(ばけもの)」「妖魅」などと表記され、「妖怪」の言葉が一般に定着したのは、近代以降だとされています。

第一章ではまず、それぞれの妖怪ひとつひとつの名前がなく、不可思議なモノの集合体として描かれて、後の「妖怪」像の原型となったであろう「百鬼夜行(ひゃっきやぎょう)図」と、その文化に連なる、幕末の絵画史料を紹介します。

そして次に、近世、鳥山石燕などの有名な絵師たちによって、日本各地の伝説や伝承をもとに、黄表紙などの庶民や子供向けの出版物、多色刷り版画である錦絵などを通じて「一つ目小僧」「見越し入道」などとして、個別の姿と名前を与えられて定型化した、おなじみの妖怪たちを紹介します。

18世紀後半は、博物学的な思考が都市住民の間に広まるとともに、幕府による殖産興業政策から特産物や商品作物の開発が奨励されるなかで、薬となる動植物や鉱物を研究する本草学が発展し、都市と地方、さらには中国などとの、様々な知識や情報の流通が盛んになりました。

化け物たちも博物学的な思考の対象となり、各地方の民間伝承のなかの化け物、妖怪などの怪異情報が交換され、もともと姿がなかった怪異に、個別の名前と姿、存在理由を与えて、分類します。新たに不可思議な怪異が発生すると、従来の分類枠に引きつけて、新たに知識を再編していく動きもあり、ますます、それぞれの化け物、妖怪の個性が熟成されていきました。

その一方で、自然環境よりも貨幣の論理が意味を持つようになった都市では「野暮と化物は箱根の先」という観念が生まれて、化け物、妖怪たちを、現実の恐怖としてではなく、地域性を切り離し、娯楽性のあるキャラクター、または人々の需要に応じた商品としての「化物(ばけもの)」として、歌舞伎や見世物、錦絵、黄表紙、子供向けの玩具絵などの出版物のなかで利用する動きも生まれていきました。

地方から江戸にきた人々は、これらの商品を土産として買い求めたため、キャラクター化した化物達は、地方へ普及していきました。つまり、もともと地方で伝承されていた妖怪が、都市の文化のなかで改造され、新しい形となって再び地方へ還っていく現象もあったようです。

その一方で、近世に日本各地に出現して、現実味のある恐怖とともに噂を呼びながらも、その情報が限られた地域に留まってしまい、後世それほど有名にはならなかった化け物、妖怪たちも紹介します。

また、実体験談として記録された妖怪絵巻「稲生物怪録^{いの う ものけ ろく}」を紹介します。「稲生物怪録」は、備後三次藩(現広島県三次市)の藩士稲生武太夫(幼名 平太郎)が、寛延2年(1749)、16歳の夏7月に、約30日間、様々な怪異や化け物に襲われた実体験を記録したものとされています。武太夫が60歳のころ、広島藩の養寿大夫人の前で語った体験談を、絵入りの記録として作成して藩主に献上した後、一時、秘蔵されましたが、近世後期の国学者平田篤胤^{ひら た あつたね}が死後の世界である「幽冥界」が存在する証拠として注目し、全国各地に写本が広まりました。

そして、近世以来の怪異譚や化け物、妖怪の話は、近代以降の美術のなかでもモチーフとして採用されました。関野準一郎(1914～1988)は青森市生まれの版画家です。昭和10年(1935)に帝選第二部会第一回展に初入選した後、上京し、木版画の制作で国内外で活躍し、現代の浮世絵師と讃えられました。彼は発行部数限定の版画集『幽霊の書』で、近世の有名な怪談や妖怪、現代の怪談を描いています。



1 百鬼夜行（ひゃっきやぎょう）

近世

東北大学附属図書館狩野文庫蔵

写本。絵巻。彩色図。

百鬼夜行（ひゃっきやぎょう）とは、深夜、京の大路を徘徊する、異様な姿の様々なもののけ、化け物の集団と考えられて、12世紀の仏教説話「今昔物語」や公家の日記にも登場します。仏教や陰陽道の影響で生まれた存在と考えられ、もともとは姿かたちのない存在、または鬼の姿として認識されていましたが、室町時代から「百鬼夜行絵巻」のなかで、道具や動物たちが変化した「付喪（つくも）神」や化け物たちとして図像化されるようになり、16世紀以降、各地に写本が流布しました。これらの百鬼夜行図に登場する化け物たちは、未だに個別の名前を与えられておらず、器物や動物、人間の変化（へんげ）、鬼などが混然一体となった集団として表現されていることがわかります。

百鬼夜行図のルーツや成立の背景については、近年、本格的な研究が始まったばかりであり、平安時代から鎌倉時代に描かれた「鳥獣人物戯画」や、室町時代から江戸時代にかけての「お伽草子」の絵画表現にも影響を受けたことが推測されています。「百鬼夜行絵巻」の源流を探るうえで、比較研究の規準として多用されてきたのが、室町時代に描かれた「百鬼夜行絵巻」（伝土佐光信画、京都大徳寺真珠庵蔵）ですが、本資料はそれと多少異なる表現が見受けられます。







4 姫國山海録 全 (きこくせんがいろく ぜん)

宝暦2年(1752)

東北大学附属図書館狩野文庫蔵

序。紙本着色。日本各地に出現した異様な生物や怪獣、化け物を記録している。享保年間、津軽地方では、秋になると粟穂を食べる生物が出現し、槍で殺されたという。また、宝暦12年(1762)4月に出羽州秋田で生まれたという、3つの頭をもつ「鬼子」と類似する情報が、同年6月3日の『津軽編覧日記』にも記されている。当時、藩領を越えて各地との情報交流があったことを推測させる。



津軽に出現した生物





5 画図 百鬼夜行 (がず ひゃっきやこう)

文化2年(1805)

東北大学附属図書館狩野文庫蔵

鳥山石燕作。原本は安永5年(1776)の作。文化2年に求版。鳥山は18世紀の浮世絵師。初め狩野派に学び『画図百鬼夜行』『今昔画図続百鬼』『百鬼夜行拾遺』『百器徒然袋』の四部作を著した。それまでの「百鬼夜行」絵のように化け物を群れとして描かずに、「見越入道」、「おとろし」、「ひょうすべ」など、一体ずつ分けて名前を付して「図鑑」のように描いた。これは「化物尽くし」とも呼ばれる様式であり、18世紀以降、海外貿易や国内の流通が盛んになることで、都市に集まってきた様々な物事に名付けをし、分類するという博物学的な思考が都市住民の間に芽生え、普及していた社会的背景があったと考えられる。ここで描かれた個別の化け物たちは定型化し、実在の恐怖の対象としてだけではなく、娯楽性も付けられた。昭和40年代にブームを呼んだ水木しげるによる妖怪マンガにも、大きな影響を与えている。



6 今昔画図 続百鬼 (こんじゃくがず ぞくひゃっき)

文化2年(1805)

東北大学附属図書館狩野文庫蔵

鳥山石燕作。文化2年求版。安永5年(1776)の「画図百鬼夜行」の続編で、山精、水虎、橋姫など53種類に妖怪を描く。



7 百鬼夜行拾遺 (ひゃっきやこうしゅうい)

文化2年(1805)

東北大学附属図書館狩野文庫蔵

鳥山石燕。原本は安永10年(1781)の作。文化2年に江戸書林が求版。『画図百鬼夜行』『今昔画図続百鬼』に続く三巻目で「今昔百鬼拾遺」とも書く。人面樹、蛇骨婆など、50種類の妖怪を描く。



13 妖怪一年草

(ばけものひととせぐさ)

近世

東北大学附属図書館狩野文庫蔵

十返舎一九作、九徳斎春画。妖怪たちが一年間を過ごす、人間の年中行事に似せて、花見が「穴見」、お釈迦様の誕生祝いが「お逆さま」、月見が「闇見」などとなっている。十返舎一九は、このようなユーモアあふれる化け物の作品を多く作り、庶民や子供向けの草双紙となった。本書に登場する妖怪達は、子供用の「玩具（おもちゃ）絵」にも流用された。当時は「妖怪」と書いても「ばけもの」と読むことが多かった。



14 錦絵 北国乃おばけ (にしきえ ほつてくのおばけ)

近世

国立歴史民俗博物館蔵 (写真提供同館)

「おいらんだ、またはありんすのくににて、夜な夜な時々、どろ水のなかからわれ、男をみると、みたよふなひとだ、もしもしとよぶ」遊女を化け物に例えた風刺画か。



15 錦絵 妖怪づくし (にしきえ ようかいづくし)
近世

国立歴史民俗博物館蔵

18世紀後半、多色摺木版画「錦絵」が開発され、美人画や役者絵、化け物画を扱う民衆の絵画として流行したが、地方色を失い、定型化された妖怪達も描かれた。



16 錦絵 玩具絵 妖怪尽くし
(にしきえ がんぐえ ようかいづくし)
年代不明

国立歴史民俗博物館蔵

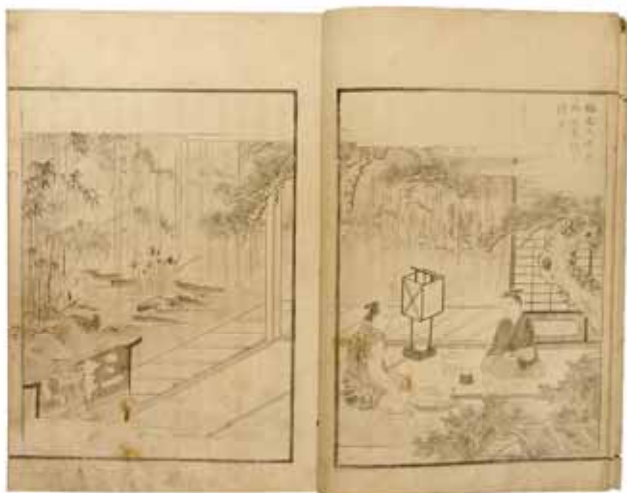
小信画。「おもちゃ絵」は子供用に作られた錦絵で、さまざまな妖怪が図鑑のように並べられている。幕末から明治にかけて流行した。



17 新版化け物づくし (しんばんばけものづくし)
近世

国立歴史民俗博物館蔵

内田邦彦氏旧蔵錦絵コレクションより。さまざまな化け物、妖怪の絵を一覧図のように並べた、こども用の錦絵である「玩具(おもちゃ)絵」はひとつひとつの絵を切り離してカルタにしたり、綴じて豆本にするといった楽しみ方があったという。このような妖怪の遊び方の背景には、近世中期以降、都市住民にとっての化け物や妖怪は、現実味を失い、恐怖や笑いのキャラクターとして利用されるようになっていたことがある。



①梅雨の徒然、両士百怪を譚る。
梅雨の日に暇を持て余し、二人は百物語をはじめた。



②約を定持（サタメ）で、英士比熊嵩に登る。
行きがかり上、英士（平太郎）が比熊山に登ることになった。

22 稲生物怪録（いのうもののけろく）

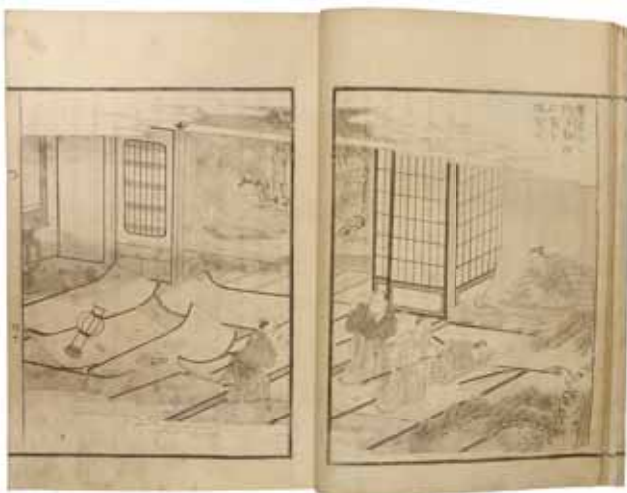
明治18年（1885）

弘前市立博物館蔵

平田篤胤による文化8年（1811）の「稲生物怪録」を、安政6年（1859）に津軽の今村真種が写しを入手し、明治3年（1870）、平田派国学の仲間である平尾魯仙に依頼して、原書の意をそのままに、画を書き足してもらい、明治18年（1885）に完成したもの。諸本と比較して、絵の構図や表現の差異が少なくない。ここでは当資料の絵画部分を全て紹介する。



③大眼為晦明、巨手抓英士。
大きな眼が明滅し、巨大な手が平太郎を掴もうとする。



④薦首（タゝミオモテ）自ら跳て、詢訪の客を悚畏（オド）す。
何もしないのに畳が飛び交い、訪問客を怖がらせる。



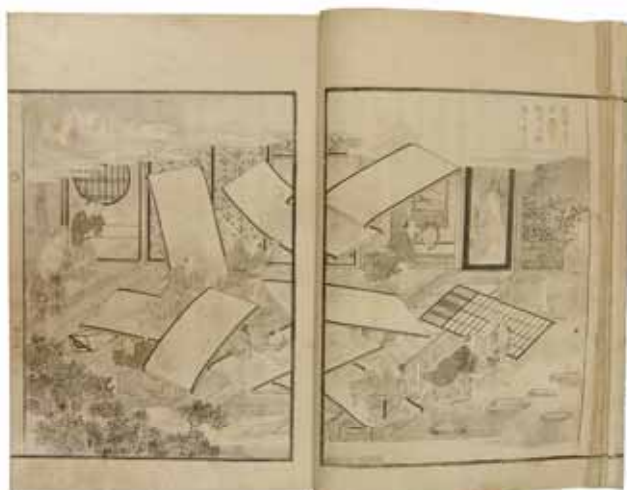
⑤履躍席上刀、遶飛而載客隻袖。
履物が踊り、刀が飛び上がり、客の服の片袖を切ってしまった。



⑥白物翔降して、両土の中間に墜。
何か白い物が飛んできて、二人の間に落ちた。



⑦挿木手形と為て、英士に簇逼す。
すりこぎが手の形になり、平太郎に迫ってくる。



⑧畳薦自ら舁揚して、詢問の数客を走らす。
畳が跳ね上がったので、訪問客は走り回った。



⑨燈火漸々に長して、藻井を焦す。
灯火が段々大きくなり、天井を焦がした。



⑩竝陥を脱して、椽（縁）中に足趾を印す。
踏石を外して歩き、縁側に足跡を残した。



⑪黒物密叢を翻出して、丁夫を縊る。
何か黒い物が草むらから飛びだしてきて、使い走りの首を絞めた。

23 幽霊の書 (ゆうれいのしょ)

昭和25年 (1950)

青森県近代文学館蔵

関野準一郎画の版画冊子。1965年改訂版も刊行されている。関野は大正初期に青森市で生まれた版画家で、海外でも活躍した。本書は限定100冊のみ刷られた。短文とともに、百鬼夜行、雪女、耳なし芳一、牡丹燈籠などの古くからの妖怪や怪談だけでなく、改訂版には「車にのった幽霊」など、現代の怪談も掲載している。



24 銅板画譜 雨月物語

(どうばんがふ うげつものがたり)

昭和19年 (1944)

青森県立近代文学館蔵

関野準一郎画。青園社私刊。関野による雨月物語の版画冊子。原本となった『雨月物語』は、鳥山石燕『画図百鬼夜行』と同じ安永5年(1776)に、上田秋成が著した怪異小説である。



第二章 妖怪が生まれた背景

日本民俗学を創始した柳田國男は、妖怪の多くが「人々の信仰を失って、零落した神々の姿である」と考え、妖怪の研究が、日本人の伝統的な信仰観を探ることになると考えました。

しかし近年では「妖怪」とは、古い神々だけではなく、もともとの魔的存在や、人間の理解を越えた超自然的な現象、それに対する人間の畏怖、恐怖、不安などから生まれた存在ではないかと考えられています。

第二章では、一般的な「妖怪」像を生み出す背景を考えるヒントとして、近世から近代の人々が暮らしの中で、畏怖し、恐れてきた不可思議な存在や様々な怪異を紹介します。

まず第一節「さまざまな神仏」では、恐ろしい姿と超能力を持ち、近世や近代以降から現在まで、多くの人々から畏怖と信仰を集めてきた、青森県内の鬼神様や水虎様などの地域の神仏たちや、天狗、疫神などを紹介します。

鬼については、「古代の中国では「鬼」の字を「キ」と呼んで死霊や亡霊を意味しました。それが日本に伝来して、長い歴史のなかで仏教、陰陽道、修験道、説話、昔話等の影響を受けながら変化します。例えば平安時代の日本の鬼は、神に近いイメージがある一方で、疫神の性格もありました。やがて日本特有の化け物、妖怪としての鬼が生まれ、地獄絵で亡者達を痛めつける獄卒などの姿を通じて、角を生やした、冷酷無比な鬼の姿が民間へと定着していき、一般的なイメージとなっています。

しかし、それでも日本各地の鬼の性格は多様であり、馬場あき子は『鬼の研究』のなかで、日本の鬼が持つ多様な性格として、①祝福をもたらす祖霊や来訪神、①山人や修験、山姥、天狗としての存在、③邪鬼や獄卒など仏教の鬼、④酒吞童子や鬼女など、人間が自ら鬼となった存在、⑤金輪の女や道成寺の女など、愛執や憎悪のために変身してしまった鬼、⑥大和朝廷に対抗した東北地方の蝦夷のイメージ、⑦特定の物事に卓越している人、集中している人などと分類しています。特に青森県域は、

古代から中央政府の支配が及びにくい化外の地として、エミシ、エゾなどと呼ばれて異界のイメージが付けられ、それが鬼のイメージにつながることもありました。

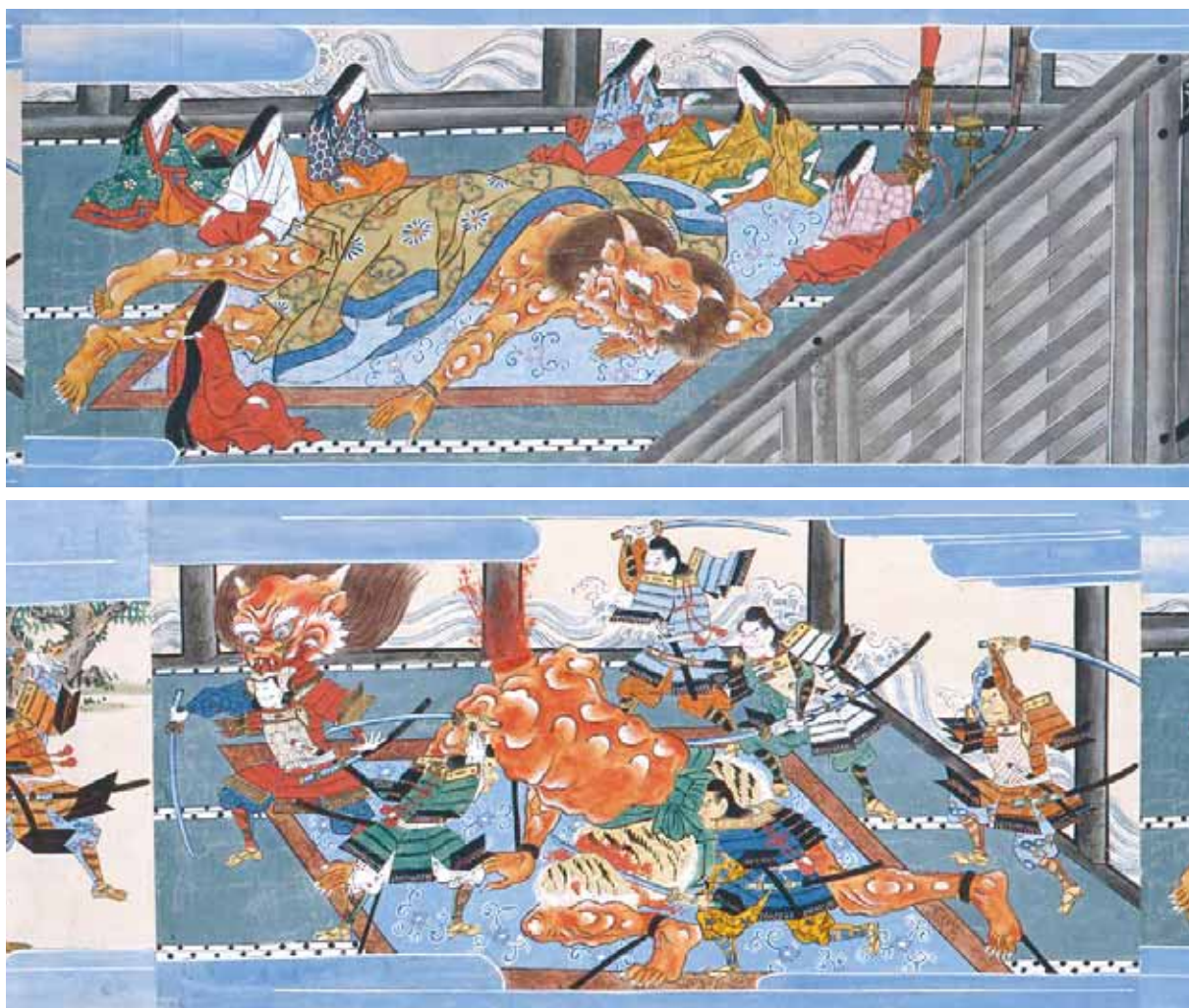
青森県内では、七戸町千曳神社の鬼退治の石、佐井村^{やのねもり}八幡宮の鬼退治の伝説、五戸町高山峠安達ヶ原の鬼伝説、十腰内の刀鍛冶と鬼伝説、毎年、階上岳を嵐とともに通過する鬼の伝説、^{おおしかり}鯨ヶ沢大然の鬼田、十和田や西の嶽（八甲田）の奥山の鬼女など、土地の神、山の神や自然神、農耕の神、製鉄の神など、様々な性格を持つ鬼たちの伝説や伝承が数多く残されています。

そのなかで現在も、鬼への信仰が盛んな土地が津軽地方岩木山麓です。岩木山では、坂上田村麿や初代弘前藩主津軽為信に加勢したり、退治されたりした鬼たちの伝説が多いです。東麓の赤倉沢でも、鬼神や大人（おおひと）の伝説があり、その地から始まって、鬼神様を信仰する、曹洞宗赤倉山宝泉院や鬼神社（弘前市鬼沢）などの複数の寺社が存在します。特に赤倉は、近代以降もイタコやゴミソ、カミサマなど、民間宗教者の修行場として、青森県内外から現世利益の信仰を集めてきました。

河童は、日本各地で様々な呼称があり、水神としての性格と、人を水難に誘う魔の面を持っていました。青森県内でもメドチ、メドツと呼ぶ地域が多く、川で人の命を取る話が弘前の国学者平尾魯仙による『谷の響』にもあり、キュウリを好むという伝承が津軽、南部両地方で確認されています。弘前藩の新田地帯である西北津軽郡地方は、水路や沼地が多いためか、水難事故が多く、その原因を河童や水神（ミズガミ）様に求めて、祭祀することが流行しました。例えば水難者が出ると、夢告やイタコの占いに水神様やスイコ様が現れ、事故が続かないように、人形や供物を川へ流すことを求めてくる場合があります。特に明治初期以降、木造の日蓮宗實相寺が中心となって「水虎大明神」として祀り、旧暦5月21日を命日とし、水難除けの御札も発行しました。その信仰は、カミサマ（民間宗教者）の活動でも普及し、近隣には同様の神



第一節 さまざまな神仏



25 大江山酒吞童子絵巻（おおえやましゅてんどうじえまき） 近世初期

国立歴史民俗博物館蔵（写真提供同館）

古代において鬼は、王権や権力に対抗する存在を象徴したもののでもあった。これは、京を荒らす酒吞童子を源頼光と四天王が退治した伝説を描いたもの。大山系の写本。近世まで酒吞童子の話は、様々な文芸や絵画作品でも取り上げられた。



26 瓦版 鬼娘（かわらばん おにむすめ）

近世

国立歴史民俗博物館蔵

一笑斎画。怪しい鬼娘が出現し、子供を取り喰らい、神出鬼没だった。年を経た魔猫が鬼火車のたぐいであろうかと推測している。青森県内でも、南部地方十日市のおつた婆さまが、かわいさのあまりに孫を食べてしまい、鬼と化して八甲田山の²⁶鷹の湯へ飛んでいったという伝説がある。

27 当年十七才鬼娘（とうねんじゅうななさいおにむすめ）

慶応年間

国立歴史民俗博物館蔵

古代から棲息してきた鬼ばかりではなく、ときに生きている人間も、愛憎や妄執のために鬼と化した。武州の渡辺庄兵衛は、養父母を粗末にした因果の報いで、浅草観音参詣中に、娘が鬼に化けてしまい、ののしられる。観世音に祈願し心を改めたら、家は繁昌し、娘も全快に向かったという。弘法布教のための話と考えられよう。



28 三本鍬の奉納額 (さんぼんくわのほうのうがく)
昭和9年(1934)

弘前市・鬼神社蔵

鬼神社は、昔、弥十郎と仲良くなった赤倉の鬼(または大人^{おおひと})が田畑の開墾を手伝い、簀笠と鍬を与えてくれたため、それを御神体として社を建立したという伝説がある。鬼神社の御神体は、直接見ると災いがあるとされ、サンボンカ(三本鍬)の姿をしているという言い伝えもあるという。



29 鬼面の奉納額 (きめんのほうのうがく)

昭和期

弘前市・鬼神社蔵

西津軽郡旧豊田村(現つがる市木造)が鬼神社へ奉納した鬼面。鬼神社の神は、角の無い鬼であるという伝承がある。



30 鬼面(阿形) (きめん(あぎょう))

年代不明 弘前市・鬼神社蔵



31 鬼面(吽形) (きめん(うんぎょう))

年代不明

弘前市・鬼神社蔵



41 錦絵 武勇雪月花之内 五条乃月（にしきえ ぶゆうせつげつかのうち ごじょうのつき）
慶応3年（1867）

弘前市立博物館蔵

三枚続きで描く妖怪錦絵の第一人者であった歌川国芳の弟子にあたる月岡芳年（1839～92）作。五条の橋で弁慶が打ちかかるも、天狗達の加勢を借りた牛若丸が身をかわしている場面。天狗は山の神への信仰や山伏像、山岳に棲息する動物像が混同して形成されたと考えられる存在で、密教の僧侶たちが多用した「魔界」の存在であり、中世に山伏姿で鼻が高い天狗像が普及した。そして、山中に棲んで飛行能力を持ち、様々な超能力で仏教を妨げたり、天下を乱す存在でもあった。古代には流星を天狗と呼ぶこともあった。



42 武芸伝書（ぶげいでんしょ）
文化8年（1811）

弘前市・小山秀弘氏蔵

文化8年（1811）。弘前藩士の剣術伝書『^{ぼくでん}卜傳流剣術目録追加』。このような、牛若丸（源義経）が鞍馬山の異人（天狗）から兵法の極意を習得したという伝承は、近世の各武芸流派伝書で多用され、その術理の神秘性、権威を裏付ける話形となった。



43 天狗のミイラ（てんぐのみいら）
近世

八戸市博物館蔵（写真提供同館）

八戸南部家旧蔵。箱には「日向州延岡産 天狗」と墨書されている。近世中期に本草学や国学が進展してきて、人々が想像した、生物の一種としての天狗を表現した標本とみられる。近年、東京文化財研究所のX線撮影により、紙の張り子、猫、鳥のヤマシギの身体を合成して作られたことが判明した。

第二節 自然の怪異



54 錦絵 こんこんちき野中の戯

(にしきえ こんこんちきのなかのたわむれ)

文久元年(1861)

国立歴史民俗博物館蔵(写真提供同館)

芳虎画、「こんちき」は「こんきち」から派生した野狐の呼び名。本画は狐に化かされて、野で酒宴を楽しむ男たちが描かれている。神や魔としての狐は、古代に中国から輸入されて、密教や陰陽師が多用し、ときに鬼や天狗と同じような役割をした。しかし民衆のなかでは、集落と自然との境界に出没して、人々を騙す、身近な存在でもあり、戯作でもよく取り上げられた。青森県内での民俗調査では、近年まで、狐に化かされた体験談を聞くことができた。



55 錦絵 電光の図説・淀川の大魚

(にしきえ でんこうのずせつ よどがわのたいぎょ)

慶応2年(1866)

国立歴史民俗博物館蔵(写真提供同館)

大坂の淀川に出現した、7尺5寸の大魚で、イタチのようなだが、背には苔、鏡のような目、足は亀のよう。その年は豊作になるという。



56 錦絵 大ひやうばんおばけぼしの図

(にしきえ だいひょうばんおばけぼしのず)

明治16年(1883)

国立歴史民俗博物館蔵

華晴画、2枚1組、明治16年4月に奇妙な雲が出現した。東へ出て光って回り、西へ入るが、一時から三時の間のことだという。絵画ではそれぞれの立場から様々な憶測をしている人々を描く。

57 異形の魚 (いぎょうのさかな)

宝暦7年(1757)

弘前市立弘前図書館蔵

「三橋日記」より。宝暦7年(1757)3月下旬、外ヶ浜石崎村(現平館村)の網に、顔は人で、角が二つあり、髪をかぶり、胸に輪袈裟のようなものをかけ、全身がうす黒い異形の魚がかかり評判となった。これは田原藩医加藤曳尾庵が「我衣 巻十四」で記録した、「神社姫」に類似している。「神社姫」は、文政2年(1819)4月に九州備前国の浜へ出現して、龍宮の使者だと名乗り、豊年や疫病を予言した不可思議な獣で、資料18との関連性が考えられる。



58 御画 男人魚 (おんが おとこにんぎょ)

近世

当館蔵横山家文書

弘前藩兵学者横山家が所蔵していたもの。包紙の記述によると、この魚を見る者は長寿になるといい、弘前藩の若殿が、「母親に見せよ」と筆写してくれたものだという。

59 人魚のミイラ (にんぎょのみいら)

近世

八戸市博物館蔵(写真提供同館)

八戸南部家旧蔵。双頭の人魚のミイラだが、近年、東京文化財研究所のX線撮影により、紙の張り子に、魚や鯉、シュロの木を合成して作られていることが判明した。このような想像上の生物を造ることはよくあったらしく、幕末の日本を記録した「ペルリ提督日本遠征記」では、当時、日本の漁夫たちのなかには、猿の上半身と魚の下半身を接合させて、人魚の標本作製して驚かせる者があり、それを描いた絵を所持すると伝染病を防げるといって商品となっていた。出島のオランダ商館から海外にも販売されていたという。



57 異物図会 (いぶつずえ)
明治20年代 (1887~1896)

弘前市立弘前図書館蔵

平尾魯仙筆。平尾は19世紀の弘前藩における平田国学の主要人物で、画人としても活躍した。本書は明治20年代に、平尾が門弟たちを使って、幕末から明治初期にかけて津軽で出現した、珍しい動植物を記録させたもの。四翼四足の雀の図、魚頭になった蝦蟇の図、岩木山麓に出た毛髪のある蛇の図など、異様な生物も描かれている。



① 安政5年 (1858)、原田宇吉から見せられた人魚。
「異物図会」魚部 (仙之写)



② 天保2年 (1831) 夏、金井沢村 (現深浦町) の海中から揚がる。
赤エイか。
「異物図会」魚部 (仙鶴写)



③ 安政元年 (1854) 6月、油川 (現青森市) で揚がった大口の魚。
「異物図会」魚部 (仙鶴写)



④ 魚頭のヒキガエル。天保5・6年 (1834~1835) 頃、弘前の白
銀町で目撃。
「異物図会」魚部 (旭高写)



⑤ 文政11年 (1828) 頃、蟹田村で捕獲されたトゲのある魚。
「異物図会」魚部 (旭高写)



⑥ 嘉永3年(1850)5月、龍鼻(竜飛か)で捕獲。岩上を滑るように歩く。
「異物図会」水之部(仙鶴写)



⑦ 平家ガニ、その他。
「異物図会」水之部(右：仙室写 左：仙之写)



⑧ 四翼・四脚のスズメ。明治7年(1874)、弘前の町内で。
「異物図会」禽部(仙之写)



⑨ 雷獣2題。伴蒿溪や滝沢馬琴の本に載っているもの。
「異物図会」獣部(仙室写)



⑩ 岩木山のある沢で目撃。イモムシに似ている。髪が生えている。
「異物図会」虫部(仙之写)



⑪ 安政3年(1856)2月、三目内村(現大鰐町)の川に流れていた虫。
「異物図会」虫部(仙之写)



79 夢幻 (むげん)

昭和37年 (1962)

弘前市立博物館蔵

絹本彩色。竹森節堂 (1896～1970) 画。竹森は弘前出身の画家で、ねぶた絵師としても活躍した。近現代の弘前ねぶたの後ろの見送りには、よく狂気を帯びた女性の幽霊や妖怪変化の絵も描かれる。



80 断首図（渡邊金三郎）

（だんしゅず（わたなべきんさぶろう））

近世

弘前市・正傳寺蔵

紙本淡彩。渡邊金三郎は、幕末の京都町奉行所与力といわれ、この絵は、倒幕派の恨みをかい、暗殺されて、さらし首にされたのをスケッチしたものだという。1976年、テレビの生放送で紹介されたとき、閉じていたはずの右目が開いたと評判になり「開眼の軸」と呼ばれるようになった。



81 断首図（僧光惇）（だんしゅず（そうこうじゅん））

近世

弘前市・正傳寺蔵

紙本淡彩。光惇は幕末の水戸東清寺僧侶だったが、幕府転覆の呪詛をしたとされて、岡田以蔵らに捕らえられ、京の三条河原で断首された。それを写し取った絵だという。この軸は弘前市の故人が、渡邊金三郎の軸とともに京都から4本購入し、後にほか2本だけ絵の遺族に返却されて残ったものだとい、所蔵しているとタンスが鳴り、母親も体調を崩したため、正傳寺に移されたという噂が残る。

82 新狂言絵葉書「四谷怪談ほか」

（しんきょうげんえはがき「よつやかいだんほか」）

大正期

青森県信用組合蔵

大正7年（1918）6月、帝国劇場における「形見草四谷怪談」の絵（写真）ハガキ。「四谷怪談」は、岩夫人が夫の伊右衛門に殺され、幽霊となって復讐する話で、19世紀に鶴屋南北の歌舞伎によって大流行した怪談。正傳寺住職故長谷川達温氏の随想によれば、大正末期、弘前市の茂森座でも四谷怪談戸板返しの絵を掲げて芝居を上演し、観客を驚かす様々な仕掛けがあったという。（長谷川「茂森座・四谷怪談の巻」『妖しきめるへん第五号』）



第三章 異界を探る

第三章では、妖怪たちが所属する非日常的な異界（あの世、神仏や魔、靈魂の世界など）を探究しようとした、青森県内での研究を紹介します。

近世後期の弘前城下では、「産女（ウブメ）」や「見越し入道」などの妖怪は、路上で遭遇しても不思議ではない存在と考えられていました。それらを防御するための呪いは、礼法や人間相手の護身術同様、日常の知識として武士たちが共有していたようです。

幕末には、平田篤胤の国学などが流行し、八戸藩や弘前藩でもさまざまな人々がその学理に基づき、身の回りの様々な珍しい事象について、具体的に研究しようとする動きがありました。例えば弘前藩では、平田学派につながる鶴舎有節、平尾魯仙たちが、藩内の神霊や妖魔に関する奇談、様々な怪異現象について記録するとともに、神霊の活動や幽冥界という異界の仕組みを明らかにし、その存在を実証しようとしていました。

近代になると、様々な学問領域から、妖怪や不可思議な現象についての本格的な分析や研究が始まります。そして国学の流れの一部は日本民俗学にも受け継がれ、人々の暮らしのなかで伝承されてきた、姿なき「妖怪」や化け物の口頭伝承についての全国的な調査が始まります。

半面、近世に図像が与えられてキャラクター化した「化物」たちも、「妖怪」として、演劇や講談の世界で、また好事家の収集活動を通じて流行していきます。

昭和40年代になると、民俗学がムラで収集した、姿が無くとも現実味のある恐怖だった「妖怪」と、近世以降、文芸作品のなかで娯楽性のある絵画として脚色されてきた「化物」「妖怪」たちが、マンガブームのなかでひとつに融合されてしまい、「古めかしく、親しみやすく、自然界とつながりをもち、異様な姿と超能力を持つ化け物」といった、現代の我々が想像する「妖怪」イメージが熟成されたと考えられています。





83 士之心得雑記 (しのころえざき) 万延2年(1861)

弘前市立弘前図書館蔵

弘前藩士川越石太郎次泰が万延2年(1861)に写したもので、武士の作法、慣習、護身術などの覚書である。なかには産女^{うぶめ}、見越し入道などの「化物」「変化」に遭遇した際の呪いも紹介されている。特に産女への対応方法は、雪女に遭遇して赤子を頼まれた弘前藩家老大道寺族之助が、口に短刀を加えて、赤子の頭にあたるようにして抱いて無事に逃れ、雪女はその知勇に負けて大力を授かったという昔話に類似している。これらの妖怪への対応方法は、村落の習俗とも共通するものが多く、当時、妖怪や化け物への対処法が、広範な階層で共有していた日常的な知識であったことが伺える。



84 古今妖魅考 (ここんようみこう) 天保2年(1831)

東北大学附属図書館狩野文庫蔵

藤田勝誠等校。林羅山の説を引きながら、禍神(まがつがみ)、悪鬼、妖怪を意味する妖魅について説く。平田門人の堀家政富、藤田勝誠、中村真幸が名を連ねている。



85 幽府新論序 (ゆうふしんろんじょ) 幕末

弘前市立弘前図書館蔵

鶴含有節(つるやありよ)著。鶴含は、19世紀に津軽における平田国学の中心的人物として活躍した。平尾魯仙と親交が深かった鶴含による「幽府新論」の序章の草案

異界探求と津軽の国学

～平尾魯仙筆「稲生物怪録」とその周辺

本 田 伸

○平田篤胤と津軽の国学

天保14年(1843)閏9月、国学の巨人平田篤胤^{ひら た あつたね}は郷里の秋田で死去した。養子^{かねたね}の鋳胤は江戸の私塾「気吹舎」^{いぶきのや}(伊吹乃屋)を引き継ぎ、平田派国学の流布に努めた。経営の才に優れた鋳胤のもと、塾勢は拡大した。平田家の「門人帳」によれば、入門者は明治9年(1876)までに4419人を数え、その居住地は全国各地に及んでいる。青森県の関係では、安政4年(1857)2月に入門した鶴舎有節^{つる や あり よ}の例が最も早い。有節はそれ以前から平田家と接触していたようで、安政3年の平田家「金銭出入覚」(国立歴史民俗博物館蔵平田文書)にも名前が見えている。

鶴舎(鶴屋)有節は本名を武田乙吉という。向学心が強く、若い頃から俳諧・書法・漢籍を学んだ。五十路目前に平田門を叩き、親友の平尾魯仙(魯僊)^{しもざわ}と語らって国学の研究サロンを開いた。江戸の下沢保躬^{やす み}に「師ハ誠にえらふへきもの」と書き送ったように、平田家への中元や歳暮を欠かさず、書籍代金は常に多めに前渡しする熱心な門人となった。

有節らはいわゆる没後門人で、生前の篤胤とは面会していなかった。万延元年(1860)11月と推定さ

れる鋳胤書簡には「先人肖像の儀、厚く御悦下され満足いたし候」とあり、平田家が求めに応じて篤胤の肖像画を描かせ、有節らがそれを喜んだ様が見てとれる。有節らは、平田家を通じて全国の情勢を知った。ペリーの再来も、コレラの流行も、鋳胤からの情報として津軽にもたらされた。

○「稲生物怪録」と平田篤胤


当館所蔵の八木橋氏旧蔵文書の中に鋳胤から有節に宛てた書簡が数多く見受けられ、有節が多くの篤胤著書を平田家に発注していた事実が明らかになっている。津軽の国学者の多くは江戸に出ることなく、平田家から送られてくる書籍によって学問に励んだのであり、一種の通信教育が行われていた。平田家は有節らに篤胤著書の価付^{あたいつけ}(価格表)を示し、注文に応じて写本を作る態勢を取った。その中に「稲生物怪録」の書名がある。

「稲生物怪録」は、備後国三次藩士の稲生武太夫^{みよし いのう}(幼名平太郎)が語った妖怪体験を、柏正甫が筆記したものである。それによれば、寛延2年(1749)7月、肝試しによって妖怪の怒りを買った平太郎は、30日

一、古史伝 第九帙目 三冊
一、赤黒太古伝 三冊
一、玉たすき 八ノ巻 一冊
一、天津祝詞考 一冊
一、大祓詞増刻 一冊
一、尻口物語 一冊
一、再生記聞 一冊

外二
一、玉樽 第九ノ巻 二冊
但し一作二而可然所、八ノ巻、大祓詞、また天津祝詞考など二部御注文御座候故、右も二部差上申候、
以上九部、今便差上申候、御改御受取可被下候、
出来次第左之物共差出し可申候、
一、五十音義談 四冊
一、皇国異称考二冊 此書ハ大扶桑国考と同様也、右ハ御所持ニハ無之哉、但し写本二而御座候、
一、三五本国考 三冊
一、西籍概論 四冊
一、しものまに 一冊
一、荒述書目 一冊
一、歌文集 一冊
一、稲生物怪録 一冊

以上八部ハ早々為写出来次第差出可申候、此外ハ未清書不相成もの共故、少し隙取可申候、
一、八品論の料御尋ニ御座候得共、右ハ進上之事、其義ニ不及候、乍去若又御入用候ハ、いくつ二而も差上可申候、
一、仙境異聞と申ハ、則寅古物語・同遷説記等之事ニ御座候、
一、昨年差出し申候書物及ひ書状之御受取書、館山氏迄御差出し之所、同氏先達而病死之よし被仰下、切々驚人申候、右ハ相届不申候得共、今更不用之もの、御心配ニ不及候、
先之書書御札旁如此御座候、最前申候通り此節多忙ニ付大略御免可被下候、頓首、
正月六日
乙吉様
尚々御端書之趣辱存候、旧冬以来寒威甚敷、御地ハ一人と察入候、折角御自愛御精学相判申候、猶近便又々可得御意候、再拝、
鋳胤 拜



稲生物怪録の受注・平田鋳胤書状(当館蔵)

の間、妖怪から様々な嫌がらせを受ける。しかし、次々に現れる化け物を退けたことで魔王の一人山^{さん}本五郎左衛門からその勇気を称えられる、という筋立てである。正甫の筆記録は天明3年(1783)に完成したが、人目に触れる機会はなかった。これを寛政11年(1799)、猗々斎竹能なる人物が許されて筆写し、以後、多くの写本のベースとなった。

現世と幽界・冥界の関係を探求し続けた篤胤にとって、「稲生物怪録」の世界は魅力的に映ったに違いない。文化3年(1806)に伝手を頼って写本を入手したが、文字の間違いなどが多かったため、同8年、大野均和に命じて新たな写本を作らせた。文政3年(1820)には、友人の屋代弘賢から絵入りの「稲生平太郎物語」を借り受けている。

篤胤の死後、養子の鋳胤は事件の舞台である三次に弟子を派遣し調査に当たらせた。鋳胤は篤胤が遺した稿本をベースに、新たな研究成果を加えた決定版を出版する計画を立てていたようで、安政6年(1859)12月には、上木用の原稿を版元に預けた。ただし、実際に板木になったかは不明である。

○「稲生物怪録」と平尾魯仙

今回展示するのは、国立歴史民俗博物館本2点と、東北大学附属図書館狩野文庫本、弘前市立博物館本の計4点である。狩野文庫本は、初の絵入り本とされる「稲生平太郎物語」の系統に属するものである。

一方、弘前市立博物館本は、有節の国学研究サロ

ンのメンバーでもある今村真種^{いまむらみ たね}(今村要太郎)が平尾魯仙に挿絵を依頼し、1冊に仕立てたものである。巻末にある真種の述懐によれば、安政6年、真種は鋳胤から「稲生物怪録」を入手したが、同書には文章だけで挿絵がなかった。そこで明治3年(1870)9月、「原書の意を採りて其形状を画かきてよ」と魯仙に依頼し、その後、真種が文章を書き入れるなどして、明治18年11月に完成を見たのである。

弘前市立博物館本は、「稲生平太郎物語」とくらべて、全体の構成や挿絵の構図が明らかに異なる。また、挿絵に数行のキャプションを入れるのは、魯仙作品によくあるやり方である。魯仙はおそらく「稲生平太郎物語」を見ていない。しかし、奇譚・怪異譚の収集や珍品・奇品の書写に余念がなかった魯仙にとって、文章から想像して挿絵に仕立てていく作業がさほど困難であったとは思えない。また、巷では鳥山石燕や葛飾北斎らによる妖怪画や錦絵の類が出回っており、そこから妖怪のイメージについてヒントを得た可能性もあろう。いずれにせよ、弘前市立博物館本は、これまでにない新タイプの「稲生物怪録」と位置づけて良いのではなかろうか。

該博な知識を称えられた魯仙には多くの著作があるが、なかでも、幽界探求の書として知られるのが、「幽府新論」である。慶応3年(1867)正月、魯仙は同書の刊行を企図し、草稿を平田家に送って論評を求めた。同年9月、鋳胤の子延胤^{のぶたね}は魯仙に書簡を送り、「興味深い書である」と感想を述べた上で「日食・

平田鋳胤書簡 鶴含有節宛

(当館蔵)
安政四年(一八五七) 力正月六日

(帯封・異筆)

「安政四年正月六日」

又申候、先達而秋田より差上候古史伝、第二ノ巻の中廿二丁之所
清書之節、ふと誤り申候間、此度右ノ丁書直し差上申候、御引替
被下、已前のハ反故となし被下可申候、以上、

旧臘五日出之貴書、今正月五日夕、中村茂春殿御持参、不取敢致拜見候、
其頃甚寒御座候所、貴家御彌御安全被成御暮、此程新春之御慶不可
有尽期日出度申候、弥以御壮榮被成越年之御事と重々奉賀候、次ニ
当方無異致加年候、乍慮外御休意被下可申候、然者昨年之貴答十月末
相届申候付、今般委曲被仰退下御念候義、御挨拶却而痛入候事ニ御座
候、猶又腰之御再熱にも可及候所、此節年頭甚事多二付、乍失礼大略
いたし当用而巳得御座候、此段御有恕可被下候、

一、去秋御注文請合申置候五十音義訣・三五本國考・神字日文伝・古
史伝之内数巻、右等其後追々出来もいたし候所、又無攪方々より急
用ニ而相送り、此節日文伝と古史伝第九帙の所計り出来有之候、扱
又右之外此度改而御注文之内、有合候分ハ未ニ書目相記し、板本共
取揃へ差出し可申候、其外之物共ハ此節書写中もあり、又ハ今より
新ニ申候而、出来次第追々ニ差出し可申候、此度右等之料として
金五兩也御差出し、慥に受取申候、入御念之義、跡ニ而も宜候所、
実ハ都合能く困窮之筆工とも相悦可申、尤も差引勘定書相記し掛御
目之様可致候、

一、去秋地震之事御尋申候所、右ハさしたる御痛も無之よし、安悦い
たし候、

一、先人自筆之物御所持之有無、内々御問合申候所云々被仰越御尤ニ
承知いたし候、元来多くハ無之候所、次第二減し候得共、いまだ少
し有之候間見繕ひ、一二葉今便進上いたし候、素より宜キものハ
無之、虫損同様のもの其段ハ御容赦可被下候、扱右等之事ニ付而も
被仰越候御紙面再三拝誦いたし、御等甚の程感懐いたし候事ニ御座
候、

一、御執心ニ付而ハ当方へ改而御入門被成度、委細御紙面之趣具ニ承
り申候、乍去拙子義元来未熟ニ御座候と先人著述之外別ニ御指南可
申筋無之候故、拙子へ御入門と申候義ハ何方へも御断り申述候事ニ
候得共、絶而御束脩御差越之方ニハ先人霊前へ披露いたし、則先人
没後門人と相称し、門人帳へ御姓名相記し候事ニ取計ひ申候、右ニ
而宜敷候ハ、無御遠慮可被仰下候、就而ハ先例御誓詞中受候事故、
乍差越右案紙此度掛御目候、

一、此度御國産片栗二折・白髪昆布三袋御恵被下、結構之御品と毎度
御心配ニ預り、何其痛入候義ニ御座候得共、長く蓄へ置追々拝味可
致、辱仕て奉存候、

一、鶴屋ハ御名字ニ候得共、また社ノ字を加へ御舎号ニも御用ひのよ
し、御便利面白く御座候、扱御実名有節(フリヨ)と御称し之事ニ
付御尋之趣承知いたし候、私名前など見候得ば、節ハ布之(フシ)、
竹中隔而有し通者也と有て、世(ヨ)と申候ハ、節をヨと申候ハ、
節と節との間の空なる所をいふ事ニ候故、節をヨと称へけるハ、
少々違ひ候へとも、互ニ通ハして云事も有之やうニ存候へば、本の
如く御唱へ被成候而も可然哉と奉存候、猶称例相考へ候様可致候、
一、御注文之書物御持合之有無一々ニ御記し被下、具ニ承知いたし候、
其内当分出兼候も有之、右ハ跡へ廻し先ツ此度有合候分、左之通
り、

一、神字日文伝

三冊

月食は凶事があるという天の戒めと言われるが、そうではないので、この部分は再考した方がいい」とアドバイスしている。その後、延胤が急逝したこともあり、「幽府新論」の出版は沙汰止みとなった。魯仙は草稿の返却を求めて平田家に書簡を送ったが果たせず、魯仙の死とともに、草稿は宙に浮いた形となった。弘前市立弘前図書館蔵の自筆本「幽府新論」は、全8巻のうち巻一から巻四までを欠いているが、近年の調査で、巻一・巻二については、平田門下である井上頼圀の旧蔵書を収める無窮会神習文庫かんならいの所蔵となっていることが確認された。しかし、巻三・巻四についてはなお所在不明である。

(ほんだ・しん 青森県立郷土館研究主幹)



○参考論文・文献

森山泰太郎「平尾魯僊」(弘前市立図書館『兼松石居・平尾魯僊・秋田雨雀』 1971)

谷川健一編『稲生物怪録絵巻—江戸妖怪図録』(小学館 1994)

沼田哲「鶴屋有節宛平田鋏胤書簡四通をめぐって」(『弘前大学国史研究』100 弘前大学国史研究会 1996)

荒俣公・米田勝安『よみがえるカリスマ 平田篤胤』(論創社 2000)

荒俣公『平田篤胤が解く稲生物怪録』(角川書店 2003)

『青森県史資料編 近世 学芸関係』(青森県 2003)

『明治維新と平田国学』(国立歴史民俗博物館 2004)



今村真種の述懐 (弘前市立博物館蔵「稲生物怪録」より)

此稲生物怪録といふ書ハ、往去し安政六年といひける年、我師伊吹舎の二世の大人鋏胤君のみ許より便りにつけておこせたる書なり。そを我友平尾芦川氏に乞ひて、原書の意を探りて其形状を画かきてよといひけるに、諾ひてさし画かきたるは明治三年と云ひける年なりしを、暇なくて其儘に文函に納置しか、あたらし書をいかて人にも見せまほしくて、这回ふりはへて、其画図の件々に原書まゝにかき入れたるに、最末に「こは往し文化三年といひける年云々、大野均和してそをかむかへ正さしめて云々」とあり。然るに今写し見るに、文字のたかひ、又仮字の誤もこゝかしこにみゆれと、こは故大人ハ更なり、大野氏の誤にもあるへからすと思ふ。そハいく度となく写せる毎に其人々の誤写にもあるへくなむ。予も又力はたらねと、そのまゝにして、唯草字を真字にかき直したるのみにて、凡て原書のまゝに写せるなり。然れど、予もまた誤字・脱字・仮名のたかひともあるへくなむ。後見む人、そをゆるしたまひて能きに改め給ひてよ。

さて師家より此原書おこしたりしハ安政六年にて、今明治十八年まで二十七年になり。芦川氏の原図をかきたるハ明治の三年にして、今茲まで十六年にハなりぬ。あはれく光陰のすみやかなる事如斯。実に昨日かもおとひかもと思ひしに、月日に関守なくて、はや三十年近くなりぬと、今更におとろかれてかくしるしつるになむ。

明治十八年一月十一日 今村真種(花押)

コラム 「お化けを守る会」

「お化けを守る会」は、昭和52年（1977）頃、弘前市の蘭繁之氏（故人）によって発足しました。当時、様々な科学文明が発達するなかで「せめてお化けの出る情緒ある世の中にしたいもの」との願いをこめた会でした。その活動は、年2回の会誌「妖しきめるへん」発行、幽霊や化物の落語や講談などの噺を聞く会を開くこと、妖怪変化の場所を訪ねたりすること、各人の怪談噺を聞く会を開くこと、妖怪絵や版画等の展覧会等を開催することでした。

毎年、秋彼岸過ぎには、弘前市内の正傳寺に、幽霊画やお化けの絵を集めて供養し、正伝寺長谷川達温住職（故人）の読経、出席者の焼香のあと、幽霊画のスライド上映、精進料理で懇親会を開き、幽霊話に花を咲かせています。

発行される会誌の表紙や巻頭には、化け物や幽霊をモチーフとした、多色刷りの版画を装丁することもあり、蘭氏や、ねぶた絵師長谷川達温氏の画が多用されています。毎号、四百字詰原稿用紙3枚以内の作品、幽霊、お化け等の画や「霊写真」を募集し、そ

れらの誌上発表を企画していたようで、大條和雄氏、大高興氏、越谷政一氏、和田陽太郎氏、南六郎氏、くどうひろのぶ氏、のメンバーが、実体験の幽霊話や怪異現象を語っており、懐古趣味だけではなく、ときにはそれが現代社会の風刺にもつながっていました。

一方で恐山ヘイタコの口寄せを見に行く会を催し、オシラ様やイタコ、川倉地蔵、高山稲荷などの民俗にも注目していた形跡があります。

また、当会メンバーは様々な出版事業に関わっており、大高興『お化けと幽霊』北の街社、関野準一郎『私家版 版画集 幽霊の書』お化けを守る会、大條和雄『妖怪豆本 久渡寺の幽霊考』緑の笛豆本の会、村田芳音『妖怪豆本 東海道四谷怪談 よもやま噺』村田芳男『怪談豆本 四谷怪談異聞』、長谷川達温『怪談豆本 津軽怪談』などの刊行物があります。



91 お化けを守る会『妖しきめるへん』1～13号

（おばけをまもるかい「あやしきめるへん」）

昭和52～58年（1977～1983）

当館蔵

「お化けを守る会」は、年2回、会誌を発行しており、13号まで刊行されている。



92 お化け版通 (おばけはんつう)

昭和52～58年 (1977～1983)

弘前市・大條和雄氏蔵

年1回の「お化けを守る会」の会合開催通知として会員に送付されたハガキ。絵は、会を主宰する故蘭繁之氏による手刷りの版画である。葛飾北斎画「百物語お岩さん」をモチーフとした絵も見受けられる。



93 久渡寺幽霊考 (くじゅうれいこう)

昭和55年 (1980)

弘前市・大條和雄氏蔵

大條和雄著、蘭繁之編、緑の笛豆本の会による発行。昭和54年 (1979) に同名で上・下巻で刊行された豆本2冊を合冊して、刊行したもの。弘前市久渡寺の幽霊画の成立や、同寺に参集するイタコ、オシラサマについての研究である。

ようかい



関野準一郎「百鬼夜行」『幽霊の書』より